

平成26年度 知事と県民の意見交換会概要

テーマ：地域資源を活用した交流人口の拡大に向けて

～人が地域をつくり、地域が人をつくる～

日時：平成26年7月11日(金) 10:00～12:30

場所：湯沢市 雄勝郡会議事堂記念館 議場

(知事あいさつ)

いま、希望は自ら作る時代。自ら置かれた状況で、ありったけ知恵を絞り汗を流す。そこで希望を見つけ、みんなで育み、いい地域をつくるという発想が必要だ。

若い人、ジャンルを問わず意欲的に取り組んでいる方の意見はすごく参考になる。政策も予算も、役人が机上で考えたのではニーズに合わない。

皆さんがどんなことをしているのか、どんなことを目指すのか考えをお聞きし、その中から県や市町村とタイアップしたり、いろんな制度とコラボしていけると思っている。今日は堅苦しくなくお話いただけるとありがたい。

※知事あいさつの後、同会場にて、皆瀬小児童の発表を見学

(知事)

よくここまで調べた。皆さん調べて勉強して初めてわかったことがたくさんあると思う。

皆瀬には素晴らしいものがまだまだある。これからもたくさん調べて大人に教えてほしい。

【参加者自己紹介】

(A氏)

今年5月からジオガイドの会会長として活動中。教員退職後何かをやりたくて、ちょうど地質に興味があり、それがきっかけで始めた。認定ガイドとして、ジオパークが活性化するように、また地域が活性化するようにお手伝いしたい。

(B氏)

湯沢市の地域おこし協力隊として4月に着任した。出身地は愛媛県西条市。

湯沢のPR、小野小町の調査などの仕事のほか、小町娘の一人として一年間活動させていただく予定。そういった形で湯沢市はもちろん、県南、秋田、東北、いろんなどころで、湯沢市のいろんな魅力を発信していきたいと考えている。

(C氏)

湯沢翔北高商業クラブに所属。クラブでは平成21年から地熱に関する研究の取組をしている。将来の可能性を秘めた資源、地熱を使って湯沢市の特産品の一つである三関サクラボを乾燥させた商品「ミッチェリー」の生産に取り組んでいる。

今日は高校生の視点で発言できたら、と思っている。

(D氏)

同じく湯沢翔北高商業クラブに所属。活動を通して、地域のいろんな人たちと関わる機会が増え、人のつながり、地域の良さを身にしみを感じている。今日はそういったことを伝えていけたらと思っている。みなさんの机の上の「ミッチェリー」を是非召し上がってほしい。この商品の良さを感じていただけたら嬉しい。

(E氏)

昨年4月から湯沢市の地域おこし協力隊のほか、湯沢市ジオパーク推進協議会の事務局員としても活動中。神奈川県川崎市出身。

当地に来る前は大学院で日本民俗学を専攻。特に無形文化財、お祭りや信仰に興味がある。湯沢の文化や歴史、民族を記録することが、後で重要なことになるのではと考え活動をしている。

(F氏)

地元で、地域限定のフリーペーパーを発行する会社で編集を担当している。

地元の良さを、地域の方々が知っているようで知らないし、どんどん風化しているものもある。地域の資源を残す、あるいはここでなければ味わえないものを伝えていくことが、未来の財産にもなると思っている。

(G氏)

小安峡温泉の女性メンバーが立ち上げた「きらめき女子会」で、温泉の歴史の勉強はもとより、誘客活動や観光に関わる部分での対応を磨いたり活動している。

小安峡周辺の観光案内人のガイドの方々と一緒に、その足跡を地図にまとめて観光客に配付したり、昨年のDCでは地酒を使ったおもてなし企画として、飲み比べセットを作ってみた。今は英語を習ってみようかと計画中である。

(H氏)

日ごろ、湯沢商工会議所で若年雇用推進員として企業を訪問し、高校生の就職先、Aターンで戻ってくる人のために情報発信している。

全国まるごとどんエキスポ実行委員会の事務局としても、県外から訪れる方々のサポートやイベントを成功させるために取り組んでいる。

【意見交換】

(B氏)

道の駅おがちで情報発信の活動に携わっている。市民の提案に基づき外国人向けのチラシを作成したばかり。必要な方にお渡しできるし、何か新しいことを企画する際にも出来る限りお手伝いさせていただきたい。「ミッチェリー」を売るときのお手伝いなども、是非声をかけてほしい。

(知事)

県外から来た方々は、秋田をどう思うのか聞きたい。

(B氏)

実は3月まで秋田に足を運んだこともなく、東北の県の位置関係もわからないほど。秋

田は米どころというくらいの認識。自分は冬の豪雪をまだ経験していない。そのせいか、今は自然が豊富で、比較的過ごしやすい、気持ちの良い空間だと思っている。

今、いろんな地域が人を呼び込もうとしている。自らが地域の宝を見つけ、発信していかないと、この地域の交流人口は増えないのではないか。ここは控えめな人が多く、地域の何がいいところかを尋ねても「なにもない」という答えが返ってくる。もっと自分たちの土地の良さを知って誇りに思う、あるいはそれを他の人に伝えるということをすれば、地域がもっと元気になると感じている。

(E氏)

ここにきて一番感じたのは、常に東京を意識しているということ。自分は、ここに来るまでは東京に関して意識していなかったし、東京がいいと思ったこともなかった。東京から客を呼び込みたいと話しているのを聞いて、改めて東京が日本の中心地だと実感した。

ここは学問的にみても、すごく魅力的な場所。民俗学の資料となる場所も多数あるが、残念ながらそれがあまり記録されていない。秋田は、なまはげだけではない。自分がいろいろ見て記録していけたら、と思っている。

(司会)

「自分が住む地域に誇りを持つべき」、「住む人が地域の魅力を感じていない」という話があった。地域と人という二つのキーワードで、今度は県内の皆さんからお話を伺いたい。

(A氏)

皆瀬の大噴湯はもちろん、サクランボ、セリ、リンゴ、稲庭うどん等、大体のことは知っていても、では、どのくらい作られているのかということまでは答えられない。

つまり、当地を知るためのアクションそのものを自らおこなっていないことが、ガイドの会を通してだんだん見えてきた。知らないから自信にもつながらないし、発信もできない。

普段、自分が子どもたちに大噴湯付近の断層が地震によって出来たという話をする時は、やがてこの中から地震のメカニズムを解明する学者が出てくれないか、と期待しながら説明している。知事が「希望は自分で作る」と仰っていたが同感。やはり自分たちで動くことが大事。地域の方が自ら活動をおこせるような気概を持つためのお手伝いがしたい。

(C氏)

翔北高校の商業クラブとして地熱の研究をしているが、校内生徒にすら地熱のメリットなどを十分に知ってもらえていない。校内で知られていないということは、地域の人にも知られていないということ。湯沢、秋田にはたくさんの良さがある。PR方法を考えながら地域の活性化に結びつけていきたい。

(D氏)

部活動を通して、湯沢や秋田にこんなにもいいものがあることを知った。どうしても「秋田は田舎」という考えの方が先に立って、誇りに思うことなどなかった。

活動を通し地域の人と交流する中で、ここには「こんなにもいい人がいる」と感じる人が多い。ここの地域の人には控えめ。だが、その人の良さもまた魅力のひとつ。自分が当地に自信を持って、誇りに思うていくことが必要だと思っている。

(F 氏)

情報発信にはいろんな方法がある。現在は紙媒体で表現しているが、他に SNS を使った情報発信など、活用できる媒体はなんでも使って秋田や県南の良さを伝えていきたい。その輪を広げることが、地域だけでなく世界とつながることになる。

3 年ほど前、三陸の震災地に要請を受けて出向いた。全国から多くの人が集まったが、驚いたのは、人集めの情報発信のスピードの速さ。情報発信だけでなく、それを相手にどうキャッチしてもらうのかも大切な仕掛けだと感じた。PR やその方法について皆さんから意見をいただきたい。

(G 氏)

自分なりに当地のことを調べて旅館の HP に掲載しており、お客さんとのやりとりも増えている。

あちこちでこういう発信を行えば、湯沢の知名度アップにつながるのではないか。生涯学習という形で、今後も勉強を重ねながら情報発信していきたい。

(H 氏)

情報発信に金をかけられるイベントとは違って、小さなイベントでは、それが例えいいものでも客が来ない。

普段企業を回って感じているのは、小さな会社でも非常に良い会社があるということ。だが、情報発信の仕方がわからないという会社もすごく多い。

自分は秋の宮温泉郷の出身。10 年ほど前、「秋田の顔事業」の宣伝効果で客がかなり増えたが、残念ながら 12 軒あった旅館が 7 軒に減って、今は観光面でかなり苦戦している。

情報発信して客を呼んだ後、それをどう継続しつなげていくか。きちんと見極めなければなかなか厳しい。

(知事)

そもそも情報発信とは何をもって情報なのか。また、交流人口というとすぐ観光という発想になりがちだが、果たしてそうなのだろうか。

国の観光調査によると、いわゆる自然観光が 8 %。都市観光が 40 %。行事観光が 40 % と、つまり、時代とともに観光の質そのものが変化している。

観光客が一番多い仙北市では、地元の祭りへの思いがものすごい。これは、とにかく自分たちのお祭りは最高に面白い、というもの。

例えばまんじゅう。このまんじゅうは日本で何番目かと聞かれて「一番です」と言えるくらいでない。要するに湯沢の売りを聞かれて、いかにインパクトある説明ができるかが大事。

(司会)

地域のつながり、人と人とのつながり、他地域、他県とのつながり、他分野、異業種分野とのつながり、広く海外とのつながり等いろいろな話が出てきた。

自分が今後どのようなつながりをもって活動していきたいか、お話を伺いたい。

(A 氏)

自分自身、まだまだつながりは薄いと感じている。

サクランボが美味しいとは知っていても、そこの生産農家の人たちと話をしたことすら

ない。どういう味をつくるために、どうがんばっているのかを知るためには、もっとつながりを持たないといけない。酒の美味しさにしても、まず自分が肌で感じる必要がある。だから、地域の地場産業やものづくりに携わっている人ともお話をしていきたい。

地域を知ることによって自信を持ち、それをさらに他に発信する。そういう役割で動いていけたら、“少しずつ”地域が活性化していくのではないかと思う。それが広がってネットワークができて、ネットワークがさらに横に伝わって行って・・・、という風に、いい循環が出来上がると思う。

(B氏)

いろんな人と協力してつながって何かやりたい、と思ってはいたが、県外出身の自分には地元の“つて”もなく、なかなか実現できないまま経過していた。だから、今日はさまざまな活動をする皆さんとお会いするのがすごく楽しみだった。

どこにでも観光資源がある中で、最近話題になっているのがストーリーづくり。旅行者は、人がその地域でどう過ごし、どうやって生きてきたのか、また訪れる人々が何を体験できるのか、という部分に重きを置いている。自分も旅行好きでいろんなところに出かけるが、選ぶポイントは、その地で活動している人そのものの魅力。

今日お会いできた皆さんからいろんな方を紹介していただいたり、自分が紹介したりと今日の機会を活かしたい。

(C氏)

私たちの活動の最大目標は地域の活性化だが、自分たちだけにメリットがあってもだめ。農商工等連携という形で、農家や菓子店と連携し、商品を開発してPRする。乾燥加工所で働くおばさんたちやお菓子屋さんにもちゃんと利益があるよう意識して、いろんな人たちとつながりをもちながら活動していきたい。

また、商品をより多くの人たちに買っていただけるよう、流通関係の人たちとつながりをもって人脈を広げていけたらいいと思っている。

(D氏)

例えば“ポチねつ”という本校の地熱キャラクター犬の型を本校工業技術科でつくってもらうなど、普段関わりを持たないところと関わりを持つことに、地域全体で取り組まないといけない。

自分たちの研究も開発も、周囲の協力やつながりで活動が成り立っている。だからこそ、交流、つながりの場がこれからもっと必要になると思う。

他には過去に先輩たちが取り組んでいたツアー企画に取り組みたい。湯沢の良さを知ってもらうために観光分野の方々と協力し、例えばお土産等でPRできたら、と思っている。

(知事)

高校生が手がけた商品開発の例では、金足農の生徒がヤマビルよけのスプレーをつくって特許をとった。実はこのおかげで林業関係者がすごく助かっている。

ところで、このミッチェリーはすごく美味しかった。これをどこに売るといい？販売対象は？

(D氏)

地域内外の方を対象にしたい。できれば特産品という形で道の駅でも。

(知事)

いろんな生地に練り込んだり、料理の材料という活用だとすると、レストラン等での活用も考えているか？

(D氏)

企業の支援や協力もいただきながら、やがてはそういう展開も考えている。

(知事)

販売価格は？それは一袋いくらか？

(D氏)

価格設定はこれから。

昨年度は771円と原価が高くなってしまった。高いが、いいものだと思っている。

(知事)

いいものだからといって、必ずしも売れる時代ではない。いいものであるのは当たり前。

問題はコストや顧客ターゲット。これで値段設定と生産量が決まる。商売の成功率は数%。誰に売めるのか、業務用なのか、お土産用なのか、対象は県外か地元か、そこを見極めないといけない。

これはすごく美味しいのだから、この食べ方をどうするのかをしっかりと考えないといけない。

例えば湯沢中のレストランで徹底して使ってもらう、どこのお店でもこれを使ったメニューがある、というくらいにしないと。卵焼きやだし巻き卵に使うなど。そういう面白い発想があるかないかがヒットするかどうかの分かれ目。ただ道の駅に置いてても売れない。

ところでトマトクリエーションという名前はどこからか？私はトマト好きだが。

(F氏)

代表がトマトジュースが飲めないということから。そこから発展して、今は、トマトを用いた化粧品(ハンドクリーム)開発などを構想中。

知事が仰ったように、問題は販売対象の絞り込みと値段設定。この折り合いをどう持つて行くか、非常に難しい課題。

(知事)

今はトマトが非常にフレキシブル。世界的にもいろんなことに使える、非常に面白い。品種改良も進んでいる。最近ではトマト鍋まで出てきた。トマト鍋はトマトを一杯使う。

(E氏)

今までの話の中でたくさん出てきた「外への情報発信」。でも、外とは一体どこなのか。情報発信とは、本来それを伝えたい人が必要とする人にパッケージにしてそれを伝えること。とかく、観光客は外から頼み。その観光で持続的に地域を作ろうとすることには疑問がある。

今、自然観光が少なくなっているという話だったが、観光の対象は時代ごとに移り変わる。江戸時代なら神社仏閣か温泉。それが都市化するにつれて都市が観光の対象になって

いる。でもこの都市ですら、この先ずっと観光の対象とはなり得ない。日本で唯一その対象であり続けるところはディズニーランド。徹底して非日常空間を提供する、あそこだけは、これからもずっと観光地であり続けると思うが。そう考えると観光客に合わせて地域を作るのは、果たして幸せなことなのか、とても疑問に感じる。

例えば神奈川県鎌倉のような一大観光地に住んでいる人たち。彼らは果たして幸せなのか。観光客は一時的に来て楽しんで金を落として帰って行くだけ。この地に責任をとってくれない。重要なのは湯沢を愛する人々が地域内外を行き来し、交流する人口を増やしていくこと。それは湯沢ファンという言い方をしてもいい。そういう人たちを取り込んで地域づくりをしていくべきだと思う。

もちろんネットワークは大切だし、地域のネットワークの構築というのはとても大事なこと。今日の他の参加者の活動を詳しく知らないのも、もっと勉強しなければならないと思う。その一方で、ここ湯沢にはいろんな活動の方々を横断的に見られる仕組みや団体がない。

ジオパークは本質的には観光ではなく地域資源の保護、保全のための活動。地域資源はどこにでもあるものだが、意味づけや価値付けがあって初めて地域資源となり得る。ジオパークの活動に地域のネットワークをうまく絡め、学術的な調査の裏付けのある資源として価値を付けていけたらいい。

(知事)

Eさんのいうことは全くそのとおり。たしかに金儲けは大切だけど、自分たちの生活、あるいはプライドを捨ててまでへりくだらなくてよい。プライドをどこに見つけるか、地元の自分たちの尺度でもいい。

角館では、地元の人がお祭りにもものすごいプライドを持っている。この徹底したプライドこそ大事。迎合しないものに、逆に人が来る。

(F氏)

観光化、俗化されてしまつてつまらない観光地がたくさん増えてきている。一方で本当に良いものには高くてもお金を払う人がいる。

秋田には本当に良いものがたくさん。地元三関のサクランボの味は日本一だと自負しているし、どこに出しても恥ずかしくない。地元の人誇り高く思っている。

川連漆器もそう、稲庭うどんも日本中から一度は食べたいと思って当地を訪れる。

この良いものを誰が評価し誰に伝えるか。点同士が線としてつながっていかないと情報は広がらない。このつながりがやがてその線上にある他地域にも波及していくのではないか。

良いものへのアンテナを常に高く張って、横につなげることが重要だと感じている。

(G氏)

今日この場に出ていろんなことを初めて知った。これを一つの土台にして、これからもいろんなところに出かけて、それをお客様にも伝えたい。そして当地をたくさん歩いて楽しんでいただけたら、と思っている。

(H氏)

うどんエキスポに他県から参加する多くの方が、地元の受け入れ体制や高校生のボランティアのすばらしさをほめてくれる。

稲庭うどんが全国三大うどんと言われ、その認知度も高まっていると思っていた矢先、先頃イベントPRで訪れた仙台で、湯沢と稲庭うどんとが結びついていなかったという話があった。湯沢の稲庭うどんとしてつなげるためには、製造業者はもちろん提供する飲食店のつながりと連携が必要。

イベントで働く高校生の働きが評価され、名古屋の会社にスカウトされた。すごくいい人材が秋田にいるという風にも映っているようだ。

今後はこのイベントをいかに、したたかに商売に結びつけていくか、本気で考えていかないと、と思っている。

(知事)

私もうどんエキスポには毎回足を運び、四杯くらいは食べている。

稲庭うどんは高級うどん。東京や海外でも高級なうどんとして知られている。湯沢のうどんまつりじゃなくて、20年くらいかけて日本のうどんまつりまでにしたらすごい。

つながりと言えば、以前、鹿角に行ったとき面白い話を聞いた。比内地鶏の養鶏業者が、地鶏の卵が余って困っているという。一方で、菓子店では比内地鶏の卵が探してもなかなか見つからず困っているという。両者は実はすぐ近くにいるのに、互いに一度も情報を交わす機会がないがゆえに、お互いの存在を知らない。

農商工連携というが、意外なことに農協の人たちと商工会議所の人との交流会がなく、一回も顔を合わせたことがない。6次産業化にしても、農商工の団体がセットになって一緒に情報交換を行う機会がないと、なかなか難しい。

ネットワークをうまく機能させるのは、実はたった一人の力だったりする。組織で動くより、非常にカリスマ性のある人が出るとすつとうまくいく。そういうカリスマ性を持った人の存在が大事。それを地元人がやると、すぐつぶされてしまってだめになる。

県、市役所、観光協会、そういうところがそういう仕組み作りをやっていかないと。

秋田は意外と縦。湯沢は特に県内でも一番素材が豊富なところ。これほどネタがあるところはない。うどん、漆器、仏壇、三梨牛、サクランボ、温泉、そしてジオパーク。大噴湯も、歴史もある。全部活かしていいはずなのに、残念ながらどれも縦。それなら全部県でやればいい、という話に及ぶかもしれないが、それは違う。役所が最初からはまると、がんじがらめのルールを作ってしまうと面白くない。これは役所としての限界。

(A氏)

県や市が手を貸しすぎるとうまくいかない、という話だが、みんなが動くにはある程度の仕組みが整わないと難しい。仕組みづくりに行政の人が加わってほしい。最初だけの発案でもいい。例えば、「自慢こミック大会」を各地でやって、子どもたちが参画すれば、それが地元を元気にする力になる。学校は時間がないと言われるかもしれないが、どうにか工夫と協力をして、若い人たちを動かさないと。若い人でないと将来的につながらない。

(B氏)

こちらの人が当たり前だと思っているものに価値を見出したい。実際に自分で歩いて見つけたいいものを提案していきたい。また、いろんな団体、組織の横の橋渡しができるような働きかけをやっていきたい。

皆瀬小の発表を見て感じたが、子どものパワーはすごい。子どもたちが学習したことを大人に伝えることによって、地域の良さ、問題に目を向けていける。本当に良い物が何か、家族で考えるきっかけにもなる。自分の立場からできるかどうかは分からないが、異学年

や他の学校の生徒との交流を増やせるようなお手伝いもしたい。

(C氏)

今日、知事にいろいろ教えていただいて、販売する上での自分の考えの浅さを実感した。

今後はもっとしっかり考え、旅館などつながりを強めて湯沢に広めていきたい。また、高校生の立場でジオパークやうどんエキスポなどの活動をしていきたい。

(知事)

人からお金をいただいてものを売るということはすごく大変。商売はすごく厳しい。厳しいのが商売。あなた方の年齢でこれを経験するのはとても大事なこと。

(D氏)

厳しい課題をクリアするために、自分たちだけでは難しいことだと改めて実感した。

学校だけでなく、外での人との関わりを増やして学びの場をもっと増やしたい。また、高校生の立ち位置を活かして地域の人とのつながりや輪を広げたい。

自分たちが個々につながるんじゃなくて、みんなでつながっていくということができる場を、自分たち自身がつくっていったらいい。

(E氏)

ジオの協議会事務局員としていろんなところで横断的に関わっている。

ネットワークを活用するのではなくて、自分がまず形をつくって活動しやすいようにネットワークを構築していくことが、湯沢市のために出来ることだと思った。自分も外の人という立場をうまく利用していったらと思っている。

湯沢市にある伝承は昔から続いているものだが、今の人たちが作っているものを今後どういう形にしていくのか。犬っこまつりが今の形になったのは昭和60年代で、もともとは信仰に基づく行事だったものが、観光イベントに移行したものだ。

今後、こうした地域の伝承デザインを考えるお手伝いができたらと思っている。

(F氏)

今日はいろんな方から話を伺って、これこそネットワークのつながりだと思った。これを機会に皆さんとつながりをもって、さらに皆さんの周囲の方々とのつながりをもてたらと思っている。

先日、酒のイベントでかつて酒造のシンボルとされた酒造会館の建物が使えなかった。市内には同様の文化的な建造物が多数あるが、多くは手つかずのまま老朽化している。これを残すか残さないか、これは自分たちの世代で決まると言ってよい。後世に残すような活動の一端に関わっていったらと思っている。また、これらは、残すだけでなく活用して初めて意義が生まれると思う。当面は、酒造会館での酒のイベント開催が目標。この建物で酒を、食を、湯沢を満喫してもらって、地域の発展に結びつけたい。

(G氏)

お客様から見どころを問われたときにフィットするような答えが返せるよう、いろんな情報を集めてお客様に伝えられるようにしたい。

また、子どもと一緒にジオパーク巡りなどもしたい。小さいときに巡った思い出が、大きくなってからまたつながっていくのではないかと、思っている。

(H氏)

生徒数の減少に伴い、会社も人手不足になることがわかっていながら採用にふみきれない。高校生も自分のイメージと違うと、すぐに退職してしまう問題を抱えている。

インターンシップなどという堅苦しいものでなくてもいい、職場や働く人同士の関わり合いなどが体験できる、そういうところに飛び込めるシステムがつくれたら、と思っている。自分自身もこれから先入観なしでいろんなところに飛び込みたい。

(知事総括)

秋田の場合、つながりはすべて縦。横のつながりが薄い。同じジャンルですら垣根がある。

県では湯沢市のジオパーク整備など交流人口の拡大に向けて、二億の交付金を出している。今後、それをどう活用していくか。

行政がしゃしゃり出るのはよくない。だが、行政が得意な分野もあることも確か。キーマンを軸に、異業種や農商工の交流会をやっている他の地域の成功事例を提供するなど、我々も後押しをする。難しいことではない、その気になれば出来る。

湯沢は酒のまちというイメージづくりも大事。酒屋のそばに行けば酒の香りがする、そういうのができないか。ここは各種物産が豊富。湯沢に来たら、例えばおちょこが全て川連漆器とか。そういう酒と漆器の組み合わせ、コラボの発想を積極的に取り入れてみてはどうか。

実際、大館ではきりたんぼを曲げわっぱで食べさせる企画がある。器が熱くないし、なんといっても木材産業と食品産業とが見事にコラボしている。これもつながりのひとつ。

そういうことで我々も県としていろんな面で連携やつながりの手伝いをしていきたい。

地域の活性化のために夢中になって走る人に、よそから知恵が入れば、ネットワークづくりはさらにうまくいく。他の情報が加わることでいろんな可能性も広がる。ということで、皆さんにも是非ともがんばってほしい。最後に、若い高校生も卒業し進学しても秋田に戻ってほしい。地元就職してほしいと期待している。

(終了)